

令和 4 年 9 月 6 日現在

機関番号：35305

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12916

研究課題名（和文）災害遺構の比較社会学 - 東日本大震災とスマトラ島沖地震を事例として

研究課題名（英文）Comparative Sociology of Disaster Remains: From the Case Studies of the Great East Japan Earthquake and the Indian Ocean Tsunami.

研究代表者

福田 雄（FUKUDA, YU）

ノートルダム清心女子大学・文学部・講師

研究者番号：50796307

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東日本大震災とスマトラ島沖地震という二つの津波災害の被災地における震災遺構の保存/解体プロセスを、主としてフィールドワークによって明らかにするものである。東北地方沿岸部およびインドネシア共和国アチェ州で実施した調査によって、二つの被災地における対照的な震災遺物との向き合い方が明らかになった。震災遺構それ自体の記録的価値に加え、その保存/解体のプロセスもまた当該地域の被災後の社会的過程として記述する意義が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インドネシアの被災地では、震災後の地域復興と観光化に資する限りにおいて積極的に被災遺物を保存する傾向が見出された。他方、日本の被災地における被災遺物の保存においては、震災伝承の意義が強調される点は共通するが、遺族感情や消費の対象とすることにかんする抵抗感が見出された震災遺構もある。地域社会における政治的対立や震災以前に遡る文脈、そして震災伝承館の展示や震災遺構をめぐる現在進行形の議論など、慎重に記述する必要があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study uses fieldwork to clarify the preservation/dismantling process of the disaster remains concerned with two major tsunami disasters, the 2011 Great East Japan Earthquake and the 2004 Indian Ocean Earthquake. Surveys conducted in the coastal areas of Tohoku (Japan) and Aceh Province (Indonesia) revealed contrasting ways of dealing with disaster remains. The research discovered not only the value of the tsunami remains to hand down the impact of the disaster, but also the value of describing the social process of discussion to preserve/dismantle the disaster remains in the disaster-affected societies.

研究分野：社会学

キーワード：震災遺構 東日本大震災 スマトラ島沖地震

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災から6年が過ぎようとするなか、震災遺構の保存/解体の選別が急速に進められている。ある震災遺構は立地地域住民の反対を受けながらも、後世への重要な意義が評価され維持・保存対象となり、他の震災遺構は一部の住民の要望にもかかわらず解体を余儀なくされている。一時と比べ落ち着いてきたといわれる震災にかんする報道のなかでも、震災遺構の保存/解体は今なおニュースバリューの高いトピックであり、その注目度は震災から年月が経つほどにより際立ってきている。

従来の研究において震災や事故をめぐる遺構は、「記憶の継承」や「商業主義・ダークツーリズム」といった観点から考察されてきた(今井2000、東ほか編2013)。そこでは後世に向けた教訓という積極的な目的のもと、忘却に抗う社会装置の一つとして震災遺構が捉えられてきた。しかし保存が決定された震災遺構の社会的な意義が注目される一方で、その保存/解体に至るまでのプロセスを明らかにする研究は決して多くないという学術的背景を指摘することができる。

2. 研究の目的

本研究は、震災遺構の保存/解体の社会的過程に着目することによって、災禍という出来事と現代社会がいかに向き合うことができるのかを考察することを目的とする。

その際、本研究は東日本大震災の7年前にインドネシアを襲ったスマトラ島沖地震の震災遺構と比較対照させることで、東日本大震災をめぐる震災遺構の保存/解体をめぐる社会的過程の諸特質を捉え返す。

本研究の独自性は、第一に東日本大震災をめぐる震災遺構を他の震災遺構との対比のもとで捉え返すこと、第二にスマトラ島沖地震をめぐる震災遺構との対比することを通じて、震災遺構の保存/解体のプロセスを浮かび上がらせる点にある。

3. 研究の方法

本研究は、主としてフィールドワークや資料収集といった質的調査法を用いて上記の問いを明らかにする。インドネシアでは平成30年度、令和元年度に、アチェ州バンダアチェ市のPLTD Apungの保存過程に焦点を当てたインタビュー調査を実施した。日本では、令和元年度および令和3年度に東北地方沿岸部の震災遺構および震災伝承施設の実地調査そして資料収集調査を実施した。

4. 研究成果

(1)インドネシアの震災遺構調査

2018年に行ったインドネシア・アチェ州での調査では、2004年のスマトラ島沖地震で打ち上げられた発電船PLTD Apungをモニュメントとして残すプロジェクトに深く関わった人物やそこで活動する語り部、現地のジャーナリストにインタビューを行った。聞き取りの結果、もともと50戸の家屋があった集落に打ち上げられた発電船について、それを観光スポットとすることに表立って反対する声は多くなかったという。なかには反対する声があったとの証言もあったが、それは土地を売却する際の補償金額をめぐる対立だった。

このほか民家の屋根に打ち上げられ、そのまま観光スポットとなった舟について、複数の語

り部にインタビューを行ったが、震災遺構として残すことについて否定的な語りは見出されなかった。

無論、震災遺構の整備や保存にかかわった人物や語り部から、その遺構の保存に至る過程に批判的な意見を聞きだすことは決して容易ではない（そのようなインタビューを試みようとしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で調査を十分に実施することが叶わなかった）。しかしながら現地の複数のジャーナリストや研究者からも、震災後の地域復興と観光化に資する限りにおいて被災遺物を保存することに反対する意見を確認することはなかった。またアチェ独自の特徴と思われるが、震災遺構として残す意義として、記憶の継承や商業主義的な観点とは異なる、宗教的な観点からの語り部が複数見出された。今後資料整理と分析を進めるとともに、このような語りをどのように位置づけるかを検討する（2022年9月の日本宗教学会第81回学術大会で発表予定）。

(2) 東日本大震災の震災遺構調査

2013年前後より継続してきた調査に加え、2019年および2022年に東日本大震災の被災地における震災遺構や震災伝承施設にかかわる調査を実施した。具体的には、陸前高田市や石巻市に所在する国立の震災伝承施設や宮城県内の自治体が運営する震災伝承施設について、資料収集や関係者・地元住民へのインタビュー調査を実施した。震災遺構の保存/解体について検討した結果、インドネシアにおける震災遺構と同様、震災伝承の意義が強調される点は共通するが、遺族感情への配慮や消費の対象とすることへの抵抗感が見出された。その多くは展示や言及の「不在」というかたちをとる。このように東日本大震災の震災遺構にかんする調査では、震災以前に遡る地域社会の文脈も含め、記述にあたって慎重を要するデータや資料が収集された。震災遺構をめぐる現在進行中の議論や今後収集される資料も含め、整理・分析を進める必要がある。

(3) インドネシアのマイノリティの記念行為

2018年から2019年にかけてスマトラ島沖地震の被災地におけるエスニック・マイノリティの記念行為にかんする調査を実施した。イスラーム法が自治法となっているアチェ州において、宗教的マイノリティでもあるエスニックグループが、いかに震災を記念し追悼儀礼を行っているか、震災発生日の集団埋葬地で参与観察調査を実施した。また宗教者や地元住民にインタビューを行ったほか、同様の関心から現地で調査を実施している研究者とディスカッションしつつデータを収集した。これまでは現地のマジョリティが行う震災記念行事に焦点を当ててきたが（福田2020）、震災をめぐるエスニック・マイノリティの記念行為は、一方では宗教的多元主義を建国五原則に含むインドネシアにおけるコンフリクトの潜在的要因として、他方ではその調停の試みとして解釈することができる（2020年3月の国際ワークショップおよび2021年6月の第62回印度学宗教学会大会において発表、2022年度に論文投稿予定）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yu Fukuda	4. 巻 14
2. 論文標題 Three-Dimensional Measurement for Revitalization of Intangible Cultural Properties After Disasters	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Disaster Research	6. 最初と最後の頁 1329 ~ 1335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20965/jdr.2019.p1329	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福田 雄	4. 巻 24
2. 論文標題 苦難の神義論と災禍をめぐる記念式典 アチェの津波にかんする集団と個人の宗教的意味づけ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宗教と社会	6. 最初と最後の頁 65 ~ 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20594/religionandsociety.24.0_65	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小谷竜介・瀧川裕貴・李善姬・福田雄	4. 巻 16
2. 論文標題 東日本大震災の影響に関する無形民俗文化財アンケート調査報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 103-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yu Fukuda
2. 発表標題 Commemorations of the 2004 Tsunami by the religious minorities in Banda Aceh
3. 学会等名 The Practicalities and Ethics of Dealing with Disaster Remains and Cultural Heritage (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 FUKUDA, Yu and BORET, Sebastien
2. 発表標題 大海嘯の神義論：印尼亞齊海嘯災難追思紀念研究
3. 学会等名 東南亞宗教文化多元研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 FUKUDA, Yu
2. 発表標題 Toward the Interdisciplinary Studies of Disaster Humanities: Preserving Tangible and Intangible Folk Cultural Properties by Three-Dimensional Data
3. 学会等名 Global Conference on the International Network of Disaster Studies in Iwate (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田雄
2. 発表標題 無形民俗文化財の復興に資する三次元計測に向けて
3. 学会等名 第3回文化財方法論研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田雄
2. 発表標題 スマトラ沖地震の記念行為と宗教的マイノリティ
3. 学会等名 第62回印度学宗教学会学术大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FUKUDA, Yu
2. 発表標題 Studi Komparatif Ritual Pasca Bencana: Aceh dan Tohoku
3. 学会等名 Kuliah Umum Prodi D-3 Bahasa Jepang
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田雄
2. 発表標題 原爆をめぐる浦上の「受難と再生」の検討 燔祭説と原子爆弾死者合同葬弔辞
3. 学会等名 第63回印度学宗教学会学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 東北大学災害科学国際研究所	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 230 (分担執筆ページ 111-114頁)
3. 書名 東日本大震災からのスタート	

1. 著者名 Martin Hoondert, Paul Post, Mirella Klomp and Marcel Barnard (Eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Peeters Publishers	5. 総ページ数 668 (分担執筆ページ 177-189, 510-513)
3. 書名 Handbook of Disaster Ritual. Multidisciplinary perspectives, cases and themes.	

1. 著者名 福田 雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 244
3. 書名 われわれが災禍を悼むとき－慰霊祭・追悼式の社会学	

1. 著者名 Yu Fukuda and Sebastien P. Boret (Edited by Nabil Chang-Kuan Lin)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Center for Multi-cultural Studies, National Cheng Kung University, TAIWAN	5. 総ページ数 414 (分担執筆ページ 227-242)
3. 書名 Religio-cultural Pluralism in Southeast Asia: Inter-communion, Localization, Syncretisation and Conflict (分担執筆"Theodicy of Tsunami: A Study of Commemoration in Aceh, Indonesia.") ISBN 978-986-05-9819-3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------